

水見市埋蔵文化財分布調査報告(丘陵地区)V

2005年3月

水見市教育委員会

氷見市埋蔵文化財分布調査報告(丘陵地区) V

2005年3月

氷見市教育委員会

序

東に富山湾を隔てた靈峰立山を仰ぐ氷見市は、古くより海の幸、山の幸に恵まれ、人々の生活の場として、数多くの文化遺産を生み育んできました。

平成10年の日本海側最大の前方後方墳である柳田布尾山古墳発見は、大きなニュースとして市民に受け入れられ、改めて氷見地域の歴史に興味が示されるようになりました。

氷見市では市内の古墳の現況を把握するため、3カ年計画で丘陵地区の分布調査を実施しましたが、さらに調査を3カ年延長し、丘陵地区の全体の遺跡を把握することにいたしました。本書はその5年目の報告書であり、文化財保護・活用の一助となることを願っております。

終わりに、調査にあたりましてご指導・ご協力を賜りました皆様に、厚くお礼申し上げます。

氷見市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、氷見市教育委員会が国庫補助事業として6カ年計画で実施している丘陵部遺跡詳細分布調査第5年日（平成16年度）の報告書である。
- 2 調査は富山県教育委員会文化財課、富山県埋蔵文化財センター、富山大学人文学部考古学研究室の指導・協力を受けて、氷見市教育委員会が実施した。
- 3 調査参加者は次の通りである。

調査担当者：大野　究（氷見市教育委員会生涯学習課主査）

廣瀬直樹（氷見市教育委員会生涯学習課学芸員）

調査補助員：細田隆博・本田晃久・間野達（富山大学大学院人文科学研究生）、池田ひろ子・伊藤剛士・岡島怜子・尾上さやか・久保浩一郎・黒木甫・久慈美咲・小林高太・佐藤浩志・真田泰光・高橋彰則・竹谷充生・水谷圭吾・村上しおり・用田聖実

（以上、富山大学人文学部考古学研究室学生）

調査作業員：三矢恵京・日南静

- 4 調査事務局は、氷見市教育委員会生涯学習課に置き、主査尾矢英一と廣瀬が事務を担当し、課長池田晃が総括した。

- 5 本書の編集は大野が担当し、執筆は第2章を大野・廣瀬が、その他を大野が担当した。

- 6 調査にあたって、以下の機関・個人の方々からご指導・ご協力を賜った。記して感謝申し上げる（敬称略）。

富山考古学会・氷見市史編さん室・氷見市立博物館

西井龍儀（氷見市史編さん委員会考古部会、富山考古学会）・宮田進一（氷見市史編さん委員会考古部会、（財）富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所）・岩上節男（氷見市立博物館協議会委員）・中居敏雄（氷見市立博物館友の会会長）

目 次

はじめに	1
第1章 本年度調査地区の地勢と研究史	2
第2章 分布調査の成果	4
第3章 中尾地区の考古資料	18
おわりに	27
参考文献	28

図 目 次

第1図 本年度の調査対象地区	3
第2図 余川川流域地区（1）	5
第3図 一石一尊仏実測図	5
第4図 余川川流域地区（2）	7
第5図 上庄川流域地区（1）	9
第6図 滝尾山遺跡概要図	11
第7図 遺物実測図	13
第8図 上庄川流域地区（2）	14
第9図 朝日山丘陵南側地区	14
第10図 十二町矢崎横穴群分布図	15
第11図 十二町矢崎横穴略測図	15
第12図 五輪塔実測図	18
第13図 中尾地区の主な遺跡	19
第14図 竹里山岩屋堂	20
第15図 中尾白山神社境内略測図	21
第16図 遺物実測図（1）	22
第17図 遺物実測図（2）	23
第18図 遺物実測図（3）	24
第19図 遺物実測図（4）	25

図版目次

図版一 分布調査の成果（1）	
図版二 分布調査の成果（2）	
図版三 分布調査の成果（3）	
図版四 分布調査の成果（4）	
図版五 採集資料（1）	
図版六 採集資料（2）	
図版七 採集資料（3）	
図版八 採集資料（4）	
図版九 採集資料（5）	

はじめに

氷見市では平成10年の柳田布尾山古墳の発見以後、氷見市史編さん委員会考古部会の調査によって多数の古墳が発見され、また一部の主要な古墳の測量調査が実施された。氷見市教育委員会では市史関連の調査の成果を元に、文化財保護の立場から市内の古墳の現況の把握と確認のため、丘陵地区の分布調査を平成12年度から3カ年計画で実施した。

3カ年の調査により、市内の古墳分布についてはかなり明らかにすることができたが、古墳よりもさらに奥まった場所に立地する山城や宗教関連遺跡などについては、まだまだ実態が十分に把握されていない状況である。

そこで氷見市では丘陵地区の分布調査をさらに3カ年延長し、古墳とは立地条件を異にする山城や宗教関連遺跡について、分布調査をおこなうことになった。

第5年目にある平成17年度は、市中部地区の主として余川川・仏生寺川・上庄川中流域を対象とし、踏査・測量・実測などの作業を行った。調査期間は平成16年11月17日から平成17年3月24日までである。

(大野 究)



調査風景

第1章 本年度調査地区の地勢と研究史

氷見市は富山県の西北部に位置し、地理的には能登半島の付け根東側にあたる。昭和27年の市制施行から昭和29年までに、旧太田村を除く氷見郡1町17村が合併し、現在の氷見市が成立した。面積は約230m²、人口は約5万8千人である。

市域は南・西・北の三方が標高200~500mの丘陵に取り囲まれ、東側は約20kmの海岸線をもって富山湾に面している。市北半部は上庄川・余川川・阿尾川・宇波川・下田川といった小河川とその支流からなる谷地形であり、上庄川流域以外はまとまった平野が少ない。市南半部は主として布勢水海が堆積してできた平野と、その砂嘴として発達した砂丘からなる。

余川川は、幕石ヶ峰(461m)に続く県境尾根に發し、約13.5kmで富山湾に注ぐ河川である。今年度は中流域左岸の丘陵について踏査を行った。

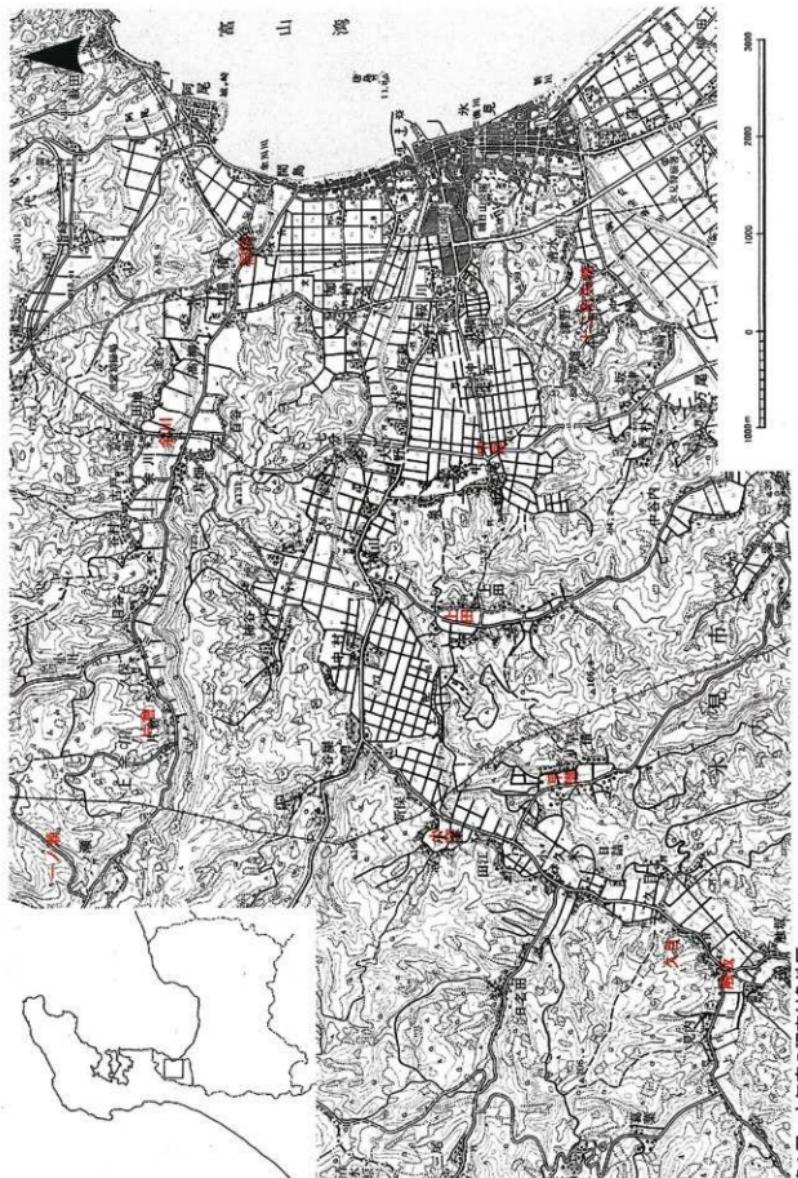
上庄川は氷見市南西端の大釜山(501m)を水源とし、約22kmで富山湾に注ぐ河川であり、市内では長さ・流域面積ともに最大である。今年度は中流域の丘陵について踏査を行った。今年度の対象地域に中世以来の宗教関連施設として伝承が残るのが、上庄川右岸の滝尾山と竹里山である。

まず、滝尾山は上庄川右岸、早借・上田・新保の各地区の丘陵一帯に広がる宗教関連の伝承地である。現在の速川神社を中心とした一帯であり、伝承によれば、この山には往古四十八坊の寺坊があったが、上杉謙信の兵火にかかり一山灰燼に帰したという。また付近には「坊」の付く地名がいくつか残っている。

次に、竹里山は泉・中尾・上田の各地区にまたがる丘陵であるが、中尾地区的山麓に白山神社が所在する。神社内には痛みが激しいが、藤原時代の作とされる仏像が残っている。また神社背後の谷中腹には岩屋堂があり、中に不動尊が祀ってある。なお、竹里山不動尊は享保19年(1734)頃定められた氷見三十三番札所の一つに数えられている。

滝尾山と竹里山は、共に中世寺院の伝承地と言われ、戦国末期に兵火によって焼失したという伝承がある。今年度はこの二箇所の寺院伝承地について重点的に踏査を行い、遺構の有無や状況の確認を確認した。なお、竹里山の麓中尾地区周辺では、これまで度々遺物が採集されており、これらの紹介も含めて第3章に記すことにした。

(大野 実)



第一図 本年度の調査対象地区

第2章 分布調査の成果

ア：余川川流域（第2～4図）

余川親ヶ谷内遺跡（第2図1）

余川川中流左岸の小谷、標高約16mに立地する。古墳時代の須恵器、古代の須恵器、土師器などが採集されている（水見市2002）。今回の調査で須恵器を1点採集した。

稲積後池遺跡（第2図2）

余川川中流左岸にある金谷地区の北東の丘陵裾に築かれている溜池とその周辺で、縄文土器、須恵器、土師器、珠形が採集されている（水見市2002）。今回の調査で近世磁器を3点採集した。

鳩八幡社の石造物群（第4図1）

上余川片倉の鳩八幡社の境内に基壇を設け、石造物が集積されている。石造物は五輪塔空風輪6点、火輪11点、水輪5点、地輪9点、宝篋印塔笠部3点、宝篋印塔基礎部3点、オベリスク状一石一尊仏1点、オベリスク状一石三尊仏1点、一石一尊仏1点、オベリスク状板石塔婆2点である。このうち一石三尊仏は、微粒砂岩の石材の正面に如来形、右側面に地蔵菩薩、左側面に観音立像が浮彫りされている特殊品である。

鳩八幡社背後の丘陵の山道をたどると小祠があり、その中に一石一尊仏が1点、不明石造物が1点祀られている（第4図2）。戦後、その付近の耕作中に出土したものという。今回の調査ではそのうちの一石一尊仏を実測した（第3図）。高さ74cm、幅28cm、厚さ9cmを測り、石材は粗粒砂岩である。正面上半分に如来仏の上半身を薄肉彫したものである。15世紀代のものであろう。

小祠がある鳩八幡社背後の丘陵には、御院藏（ゴインヅウ又はゴイングラ）という地名が残り、かつて真言系の寺院があったという伝承がある。境内の石造物や、坊坂（ボウサカ）という地名も寺院の名残とされる。八幡社周辺には寺院跡を思わせる小平坦面が存在するが、詳細は不明である。

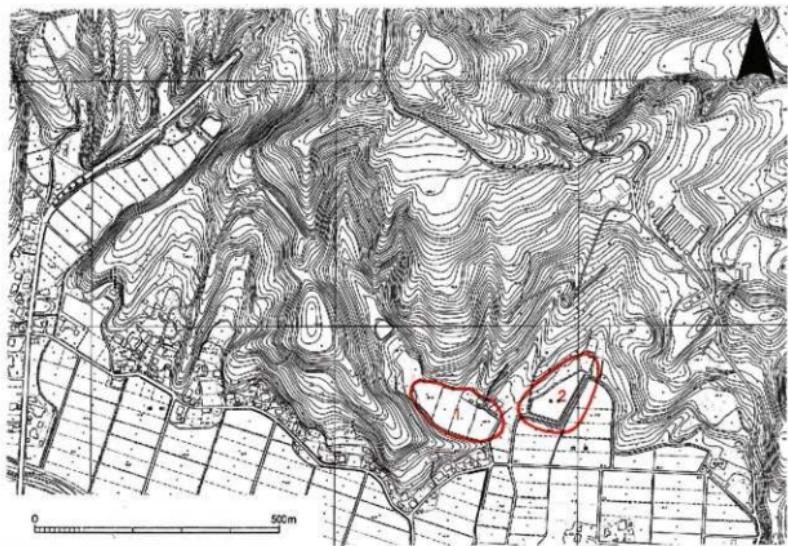
八幡社の石造物（第4図3）

上余川一の瀬の八幡社境内にケヤキの大木があり、その根元に石造物が集積されている。石造物は、五輪塔空風輪が1点、一石一尊仏が2点、オベリスク状板石塔婆が9点、不明石造物が4点である。

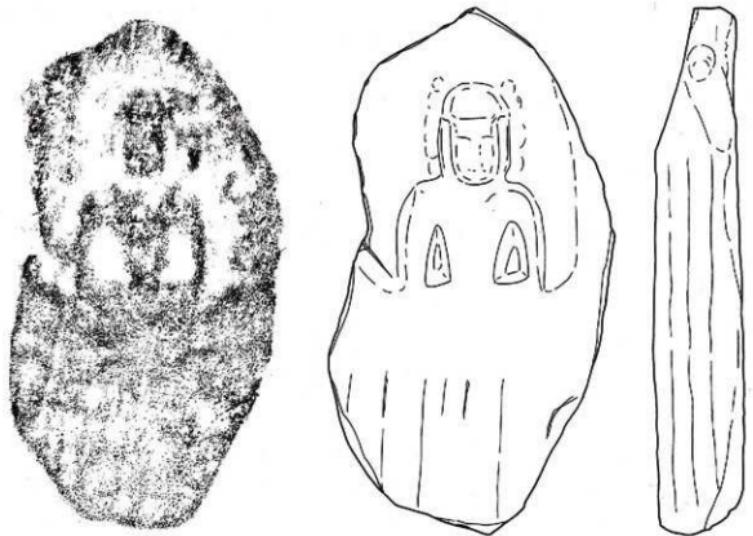
イ：上庄川流域（第5～8図）

滝尾山遺跡（第5図1、第6図）

滝尾山には、中世に四十八の寺坊があったが、上杉謙信の兵火にかかり廃絶したと伝えられる。現在でも周辺一帯には金剛坊、光光坊、護摩堂、講堂跡、業塚といった俗称地名が残っており、過去には周辺で金剛仏、銅鏡、土師器、太刀などが採集されている。また、滝尾山北側に位置し、丘陵と上庄川に囲まれた通称伊尾田という水田地帯では、昭和初年に耕地整理された際に南東の堂の池と呼ばれる池で懸仏、石造物が出土している。その石造物は新保神明社の境内に集められており、現在確認できるものは五輪塔残欠（火輪4、水輪2、地輪1）、一石一尊仏2、オベリスク状板石塔婆4で、その他自然石と判別不能なもののが数個ある。また伊尾田に立地する新保南遺跡で2002年に実施された発掘調査では、古代から中世の遺物と遺構を確認したが、その主体は7世紀末と12世紀末に集中する。伊尾田には新保領側から滝尾山への参道がついていたといい、滝尾山との関連が注目される（熊無村史刊行委員会1997・速川村史編集委員会1987・水見市教委2003）。



第2図 余川川流域地区(1)



第3図 一石一尊仏実測図 S = 1 / 5

『速川村史』に掲載されている「滝尾山略図」と、「熊無村新保横穴所在圖」(林1930)を参考にして地形図に書き込んだものが第6図である。今回の踏査では、この滝尾山略図に基づき、現況の確認を行った。

図中、「護摩堂（ゴマンドウ）」と表示される場所は、山頂の円形で緩やかなふくらみを持つ平坦面で、現況では建物の痕跡を見出すことはできなかった。また「横穴」と描きこまれた地点周辺の斜面を精査したが、横穴は発見できなかった。

滝尾山遺跡の周辺には、イヨダノヤマ古墳群、速川神社古墳群が立地する。それぞれの古墳群には方墳もしくは段状墓が連なる一群があり、これらが滝尾山遺跡に関連する施設の基壇である可能性も残される（氷見市2002）。特にイヨダノヤマ古墳群の7～11号墳の付近には「業塚」という地名が残っている点に注目される。また「熊無村新保横穴所在圖」に「円山」と記載される場所はイヨダノヤマ古墳群のうち、12・13号墳を指す可能性がある。

今回の踏査では残念ながら遺構に関する新たな知見は得られたなかったが、伝承や地名、過去の出土品の存在から、滝尾山に中世に何らかの宗教関連施設が存在した可能性は高い。今後発掘調査などの機会があれば、より具体的な様相が明らかになると思われる。

小窪廃寺（第5図2）

小窪廃寺跡では今回通称「塔のスマ」と呼ばれる場所で須恵器1点を探集し、これを図示した（第7図1）。須恵器無台杯の底部破片であり、底径6.6cmである。

小窪瓦窯（第5図3）

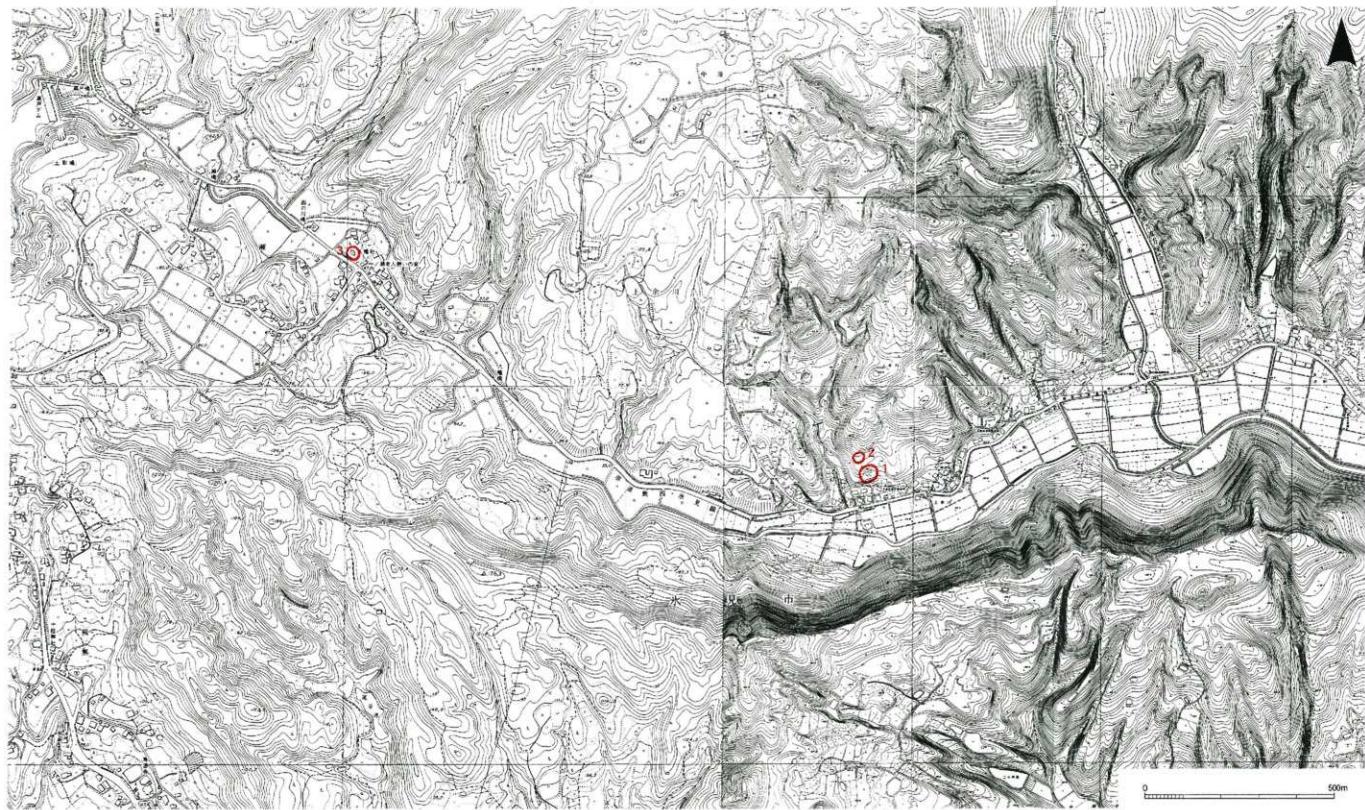
上庄川左岸の丘陵裾、標高20～23mに位置する。直線距離で北に約300m離れた小窪廃寺に瓦を供給した窯跡と考えられる。地下式有段窯と推定され、全長は不明であるが窯尻部約2.3mの天井が残る。窯体は現在も半ば埋もれながら残存している。

今回の調査では窯の崩落した開口部内側で平瓦を1点探集した。探集した平瓦は約6.5cm四方、厚さ2.4cmの破片であり、焼きが悪く胎土は砂っぽい。布目は摩滅しており確認できない。叩き目は斜格子B4類である。

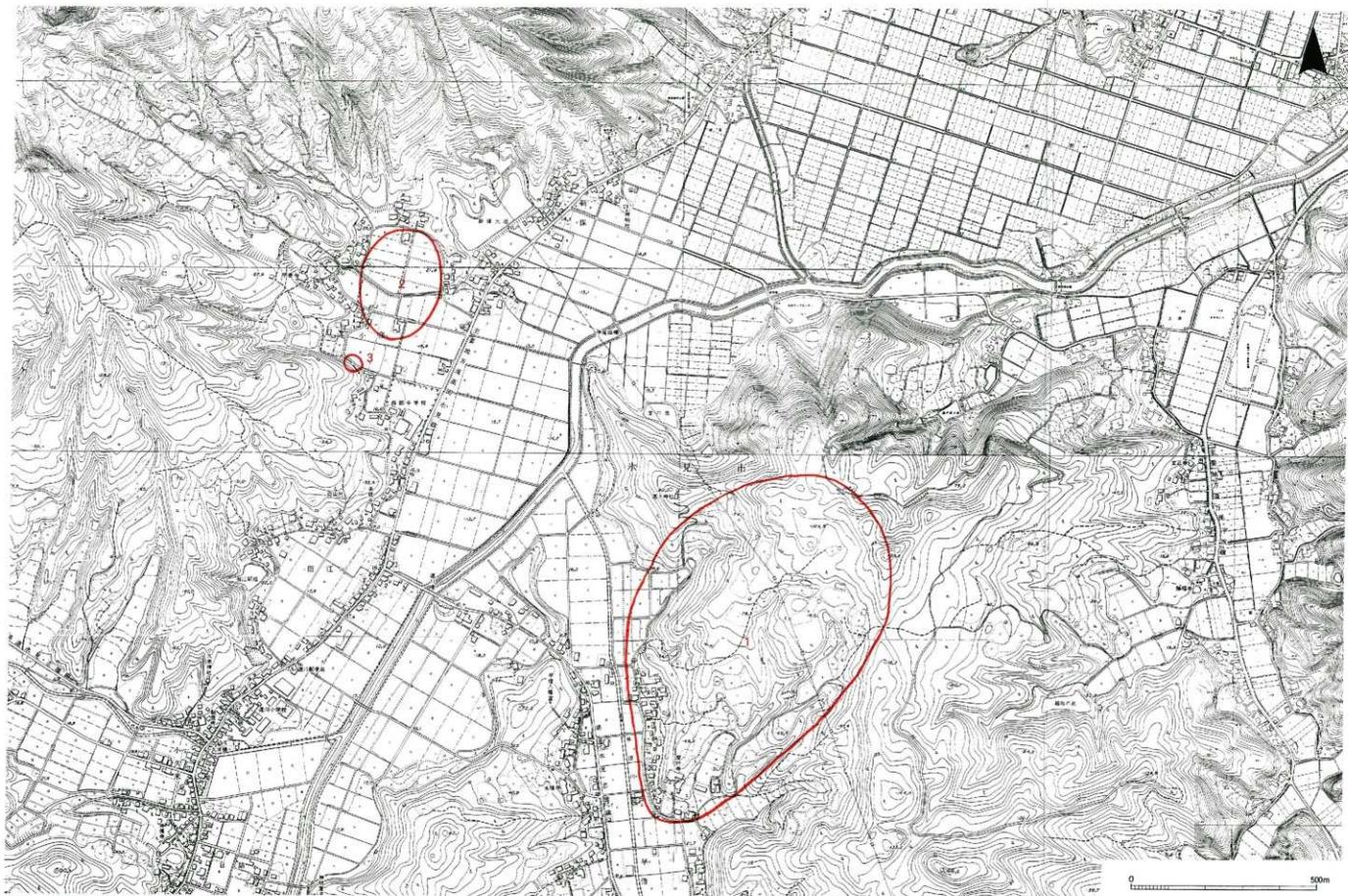
久目経塚（第8図）

一字一石経が納めてあったという伝承があり、近在する触坂古墳群と重複する可能性がある（氷見市2002）。また久目村史によると「紹光寺山に写経を埋めた」という伝承が残っているという（久目村史編集委員会1990）。

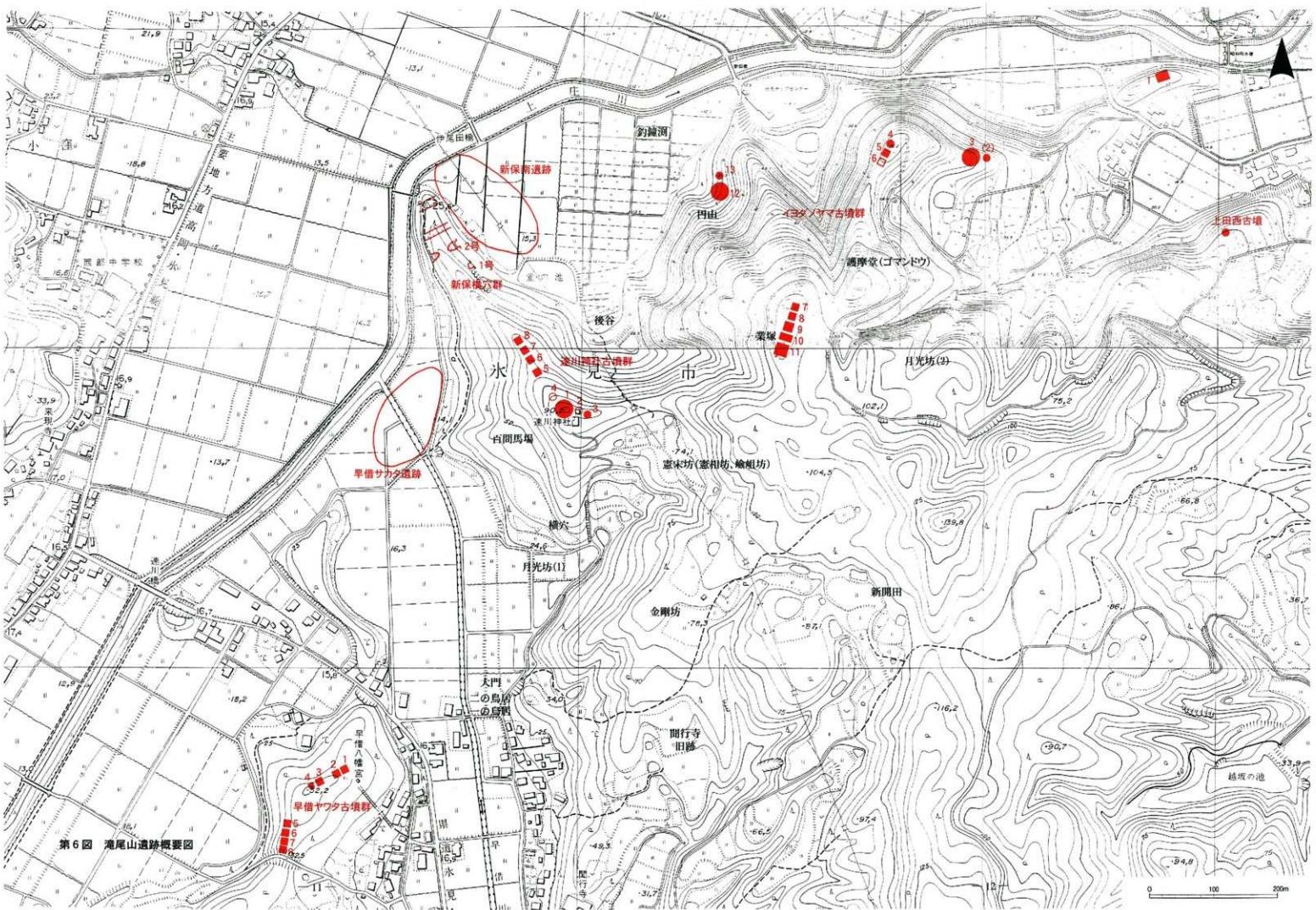
現況ではどの地点を指して久目経塚と呼んでいたかは不明であるため、重複の可能性がある触坂古墳群について『氷見市史 資料編考古』より引用しておく。触坂古墳群は、上庄川の左岸、上庄川と桑院川の合流地北側の丘陵に分布する。南に張り出した台地のふもとには曹洞宗紹光寺があり、古墳はその背後標高約50mの台地縁辺に5基あり、さらに標高62～67mの台地上緩斜面に5基の占墳がある。4・5号墳は長方形で低平な墳丘である。弥生時代終末から古墳時代初頭との見方もできるが、久目経塚の伝承地も近くにあることから、中世の塚・墳墓の可能性も残る（氷見市2002）。なお、富山県埋蔵文化財センターに保管されている昭和38年作成の埋蔵文化財包蔵地調査カード添付の久目経塚見取り図を見ると、久目経塚と触坂古墳群4・5号墳の位置が重複する可能性が高い。



第4図 余川川流域地区(2)



第5図 上庄川流域地区(1)



第6図 浦尾山遺跡概要図

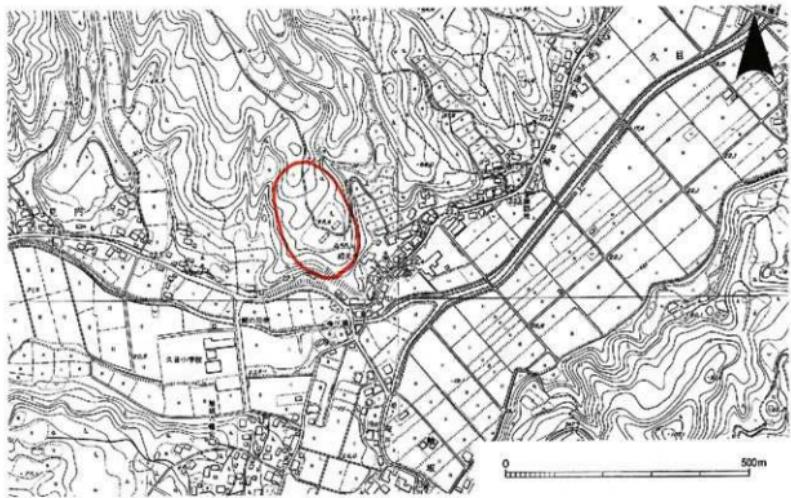
さて、氷見高校旧蔵の遺物の中に、久目経塚出土とされる砾石経があるので、ここで紹介しておきたい（第7図3）。出土の状況、時期などは不明であるが、前述の昭和38年作成の調査カードにはすでに氷見高校が一字一石経の経石を保管している旨が記入されている。

砾石経は、伝承にある一字一石経とは異なり、多字一石経である。長さ7.8cm、幅5.5cm、厚さ3.8cmを測り、重さは216gである。不整形の自然石の平らな面の長軸方向やや左寄りに墨書きで「自矜高詔」と記されている。「詔」は「誄」の異体字である。字の大きさは「自」がやや小さく縦1.2cm、横0.9cmとなるが、他の3字は約1.5cm四方のはば正方形の範囲内に書かれている。

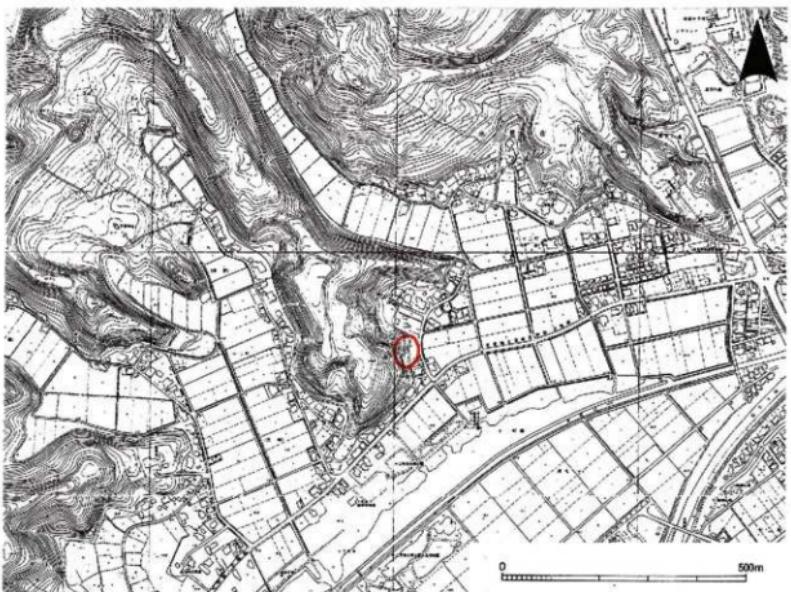
法華経の一節に「我慢自矜高詔曲心不實」とあり、この経石の文字がその部分を指す可能性があるが、経石に書き込まれた箇所と本来の文節の句切りは一致しておらず、検討を要する。



第7図 遺物実測図 S = 1 / 2



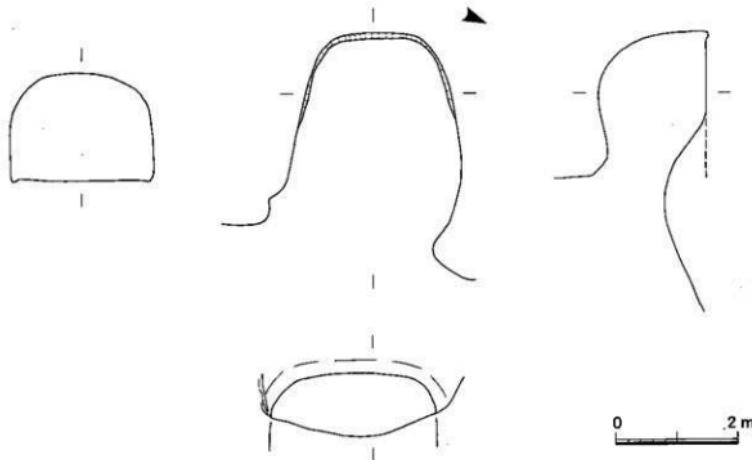
第8図 上庄川流域地区(2)



第9図 朝日山丘陵南側地区



第10図 十二町矢崎横穴群分布図



第11図 十二町矢崎横穴略測図

ウ：朝日山丘陵南側（第9～11図）

十二町矢崎横穴群（第9～11図）

今回の調査で新たに発見した遺跡である。横穴群は十二町矢崎地区、十二町渦に張り出す丘陵の東側斜面に所在し、標高約4～9mに三段にわたって築造されている。下段は現地表面からの高さ約1m、中段は現地表面からの高さ約3.3mに立地する。上段は、現地表面から約6mの高さにある南北約13m、東西約6mの平坦面に面して立地する。横穴は泥岩質の岩盤に穿たれている。また、横穴の立地する斜面を大きく切り欠いて現代の墓所が造成されているが、この墓所自体が横穴を利用して造成された可能性がある。遺物は採集していない。

横穴は、開口しているものが1基、開口し天井部が崩落しているものが1基、土砂で埋没したものが2基ある。また前述した墓所では、壁面の観察から最低2基程度の横穴の存在が推測される。そのほかに横穴の可能性があるくほみが3箇所確認でき、おそらく10基程度のまとまりをもつ横穴群であろう。このうち今回の調査では開口している1基の実測を行った。

実測した横穴は玄室が残存しており、東向きに開口している。玄室の方向は現在の斜面に対して斜め向きで、狭道を含む入口部分が崩落している可能性がある。玄室は奥行約3.3m、幅約2.7m、高さ約1.8mを測る。平面形は隅丸長方形、立面形はドーム型である。床面には奥壁に沿うようにして溝が掘られている。

周辺の横穴群としては、朝日谷内横穴、坂津横穴群がある。いずれも朝日山丘陵の南側に布勢水海に面して立地している。特に坂津横穴群は36基の存在が知られ、布勢水海（現在の十二町渦）一帯を墓盤とした有力層の長期にわたる墓域であったと考えられている（氷見市2002）。十二町矢崎横穴群も布勢水海に面した丘陵に立地しており、布勢水海と密接にかかわりを持つ集団の墓域だったと推測される。

なお、横穴群のすぐ近くで幅約0.8m、高さ約1mで岩盤を掘り抜いた水路状の遺構を確認した。断面形はきれいな長方形に整形されている。中に入ることができず、詳細は不明である。

また、墓所として造成された場所が横穴を利用して造成された可能性について前述したが、別な可能性に付いても考えてみたい。

平成13年度の分布調査では、加納横穴群の近くで、崖面を「コ」の字型に切り欠き、8m以上垂直に切り立てた遺構を確認している（氷見市教委2002）。この遺構は仮に石切場跡と推定しているが、詳細は不明である。十二町矢崎の墓所の造成も同様に、崖面を「コ」の字型に切り欠き、垂直に6m切り立てている。この2箇所の遺構が同種のものであるとすれば、横穴に付随する施設、または横穴の後世における再利用といった観点から検討する必要があるのではないだろうか。

エ：その他

戸津宮千人塚付近経塚伝承地

昨年度の報告書で戸津宮（上戸津宮）地区に所在する千人塚の測量図を掲載した。その後に判明した事項についてこの場で報告しておく。

大森村（現在の上戸津宮）に居住した大森大工の屋敷地を描いた『天正十六年春越中水見郡大森村大工屋敷之図』（高森駒喜代氏作図）には、「戦人塚古戰場」（千人塚）の北側、石動山登拝道のひとつ大塚道をはさんだ位置に「経塚」と書き込まれている。また経塚のさらに北側には「寺」と書かれた区画が存在する。この「経塚」「寺」は、これまでの千人塚の調査では取り上げられてこなかったもので、今回の調査で現地確認を行った。

千人塚の東側は急な崖になっているが、北側に行くにつれてなだらかになり、下方に水田が広がる。崖と道路（大窪道）の間が土壘状に盛り上がっており、水田近くになるにつれて幅が広くなっていくが、その北側端部にマウンドがある。マウンドの位置は、千人塚や現在の屋敷地から判断すると、図中で経塚とされている地点と合致している。

マウンドは長径約4m、短径3.5mの隅丸方形で、頂部東寄りには40cm大の石が1個のる。道路の拡幅で西側が削られている可能性がある。遺物は確認していない。戸津宮地区の高井秀一氏の話では、「屋敷地なり、大窪道なりを切り開いた際の残丘かもしれません、図に経塚と書かれた以上の伝承はない」という。

また、図中「寺」と書かれた区画と推定される場所には、現在は水田に囲まれた約30m四方の小高い丘がある。丘の上は墓地として使われており、古いもので明治期の墓石が確認できる。また反花を刻んだ礎盤状の石造物が1点置かれている。高井氏によると、丘の北側の水田をテラヤシキと呼んでいるという。

未練坊の祠

昨年度の調査で、長坂落合中世墓の対岸で小祠と平坦面を確認した。昨年度の報告の時点では見落としていたが、この小祠は長坂行入塚の伝説と関わる「未練坊の祠」である。未練坊の伝説については『富山県石動山信仰遺跡遺物調査報告書』（氷見市教委1984）に収録されている。

平沢のホウバヤシキ

平沢地内のホウバヤシキと呼ばれる場所で今から百年ほど前に逆さにした大甕が出土し、中にはミイラ状の人骨があったという（氷見市教委2004）。

この甕について、地元では残存していないということであったが、『氷見市遺跡地図』（氷見市教委・氷見市博1983）に、「平沢地内出土珠洲焼」として珠洲大甕の写真が掲載されており、これがホウバヤシキ出土のものである可能性がある。この甕は口径67.0cm、器高60.0cmではほぼ完形と見られる。

（大野 究・廣瀬直樹）

第3章 中尾地区の考古資料

上庄川右岸に沿う丘陵の一角に、竹里山が所在する。最高地点は標高137mであり、ここからは東方向に、氷見市街地や富山湾を遠望することができる。

竹里山の頂上には中世山城である千久里城跡があり、中腹には現在も不動尊を祀る岩屋が所在する。山腹の中尾地区には白山神社が鎮座し、その前面の水田では明治頃に古代の金銅仏が出土している。

このように中尾地区には中世山城だけでなく、宗教関連の遺構が数多く存在するようである。また、中尾地区周辺には遺物の散布地が数多くあり、今回の踏査で採集したもののほか、中尾地区在住の中尾敏雄氏（元氷見市立博物館館長）が、折々に採集された資料が同博物館に所蔵されている。

ここではこれら中尾地区的資料をまとめて紹介したい。

千久里城跡（第13図1）

千久里城跡は南北朝期～戦国期の山城である。氷見市教委が昨年度と今年度の二ヵ年にわたり測量及び試掘調査を実施した。詳細はそちらの報告書（氷見市教委2005）を参照願いたい。

竹里山岩屋堂（第13図2・第14図）

竹里山の東斜面中腹、標高約65mの地点に所在する。ここは中尾の白山神社背後の谷にあたり、岩屋は南西に向けて開口している。

岩屋へは地山岩盤を直接掘り込んだ階段状の参道が付けられており、これを登り切った岩屋前には幅約6m、奥行約1.2mの平坦面がある。

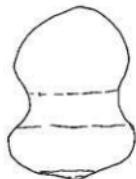
岩屋は地山岩盤を削り抜いて造られている。長さ1.5m、幅1.2～1.6m、高さ1.5mを測る狭道状の出入口の奥に、長さ4.5m、幅3.3～3.5m、高さ1.5～1.6mを測る直方体状の窟がある。窟の奥壁前には幅1.4m、奥行1.35m、高さ0.27mの護摩段状の基壇が造られており、中央には直径27cm、深さ12cmの穴が穿たれている。奥壁には高さ1.3m、幅1.3m、奥行0.6mの龕が造られ、そこに石製の不動明王が祀られている。遺物の採集はない。

白山神社境内（第13図3）

この神社は元々白山社の社号であったが、昭和2年8月、宇神明鎮座の神明社、宇坊田鎮座の少彦名社、宇寺毛鎮座の諫訪社が合祀され、白山神社と改称された。

境内の略図を第15図に示した。拝殿は20×25mの平坦面に所在する。本殿は15×15mの平坦面の北東寄りに所在する。拝殿から本殿に至る階段状の参道は、現在途中で崩落しており、その代わりであろうか、現在拝殿左側から一段の平坦面をはさんで本殿の平坦面に至る階段が敷設されている。このように境内にはいくつかの平坦面を確認することができるが、背後の林道から出入りするために周辺の地形が改変されていることもあり、現状ではこれらの平坦面を遺構面としてとらえることは難しい。

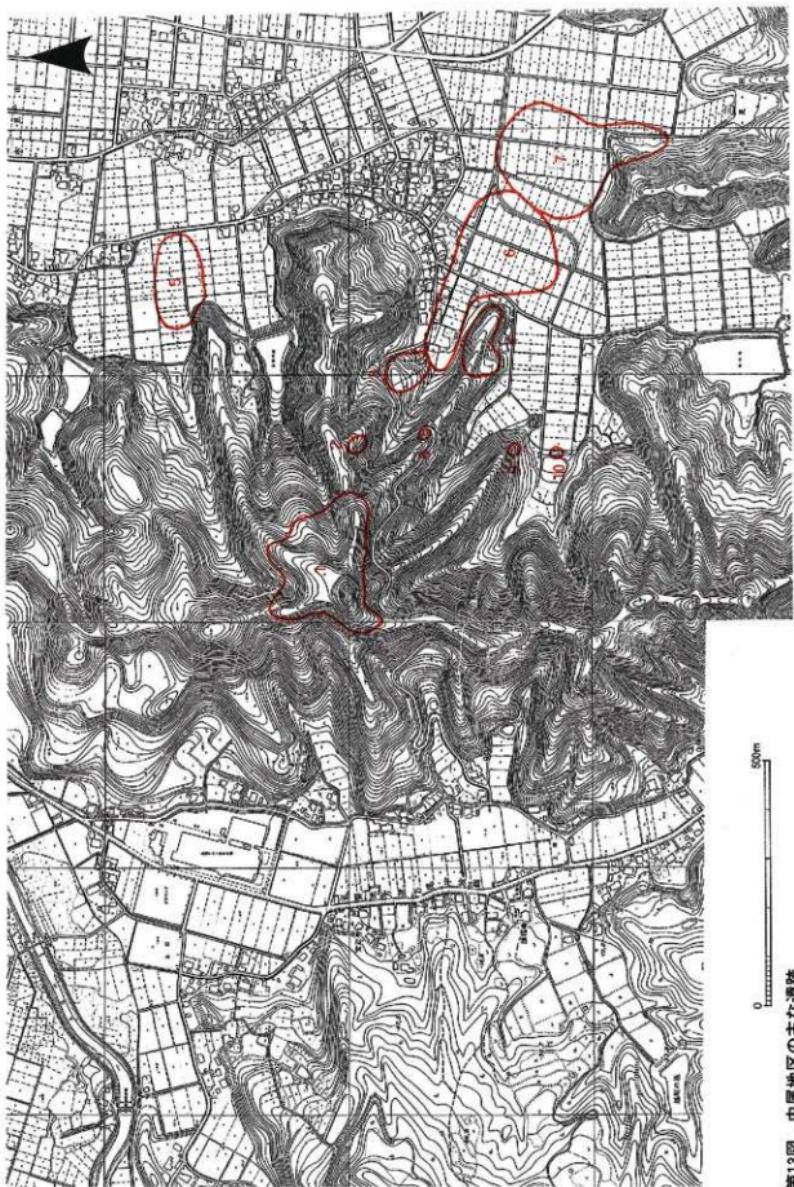
第12図は境内に所在する五輪塔空風輪の実測図である。高さ14cm、最大径10.5cmの微粒砂岩（蕨田石）製のものであり、空輪と風輪の境がはつきりしないタイプのものである。16世紀頃のものと推定される。



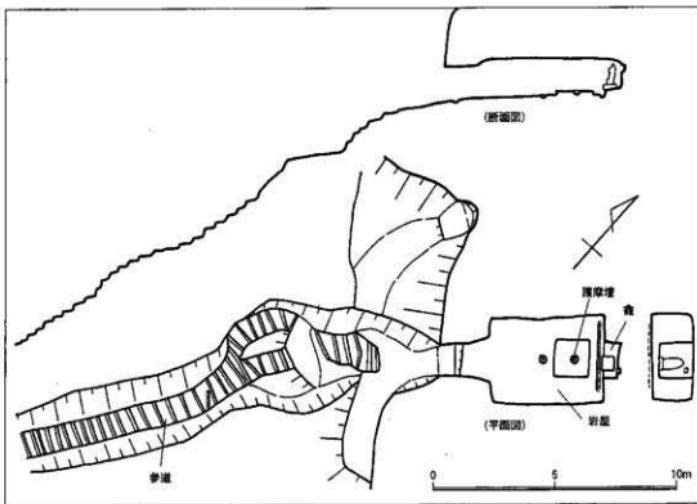
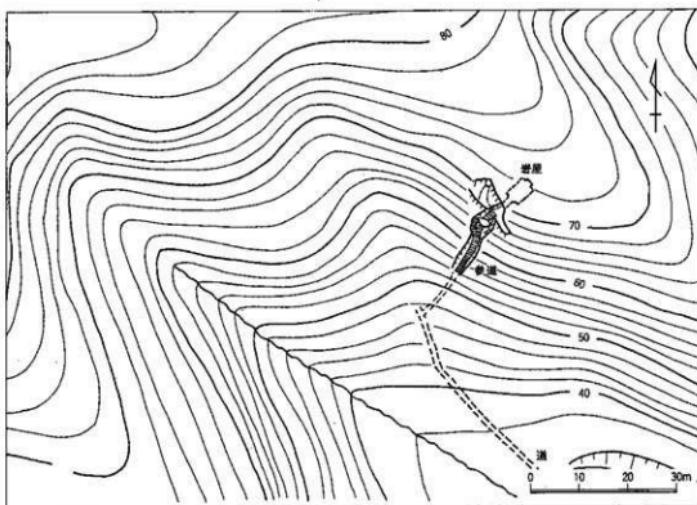
第12図 五輪塔実測図

S = 1 / 4

0 500m

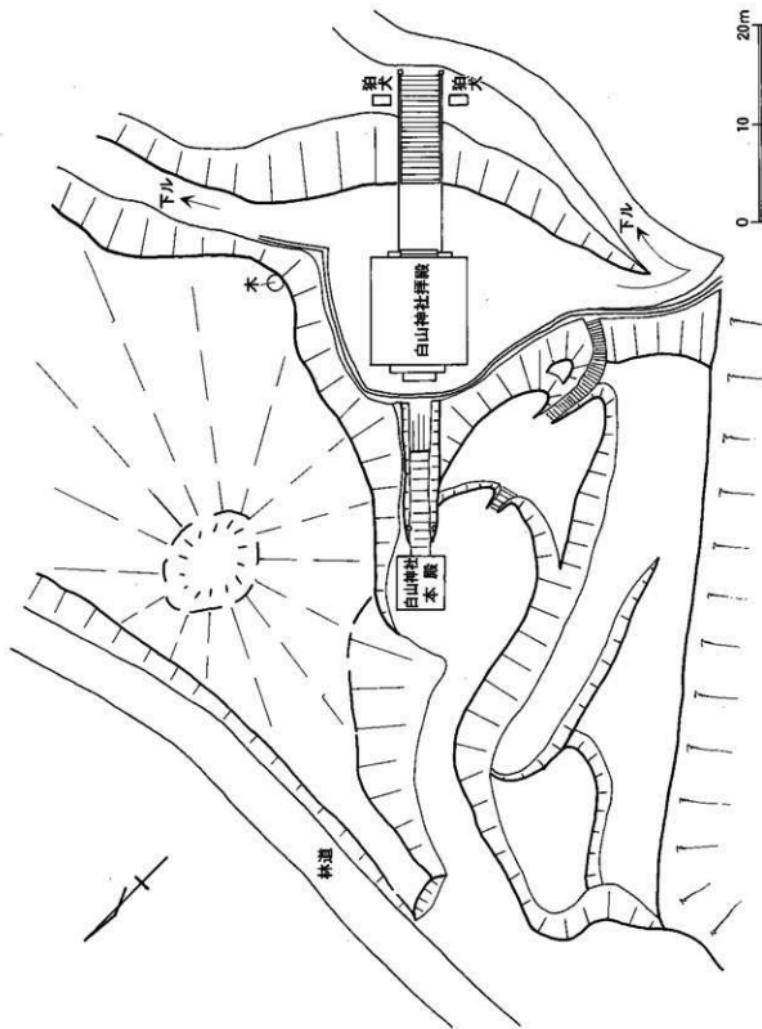


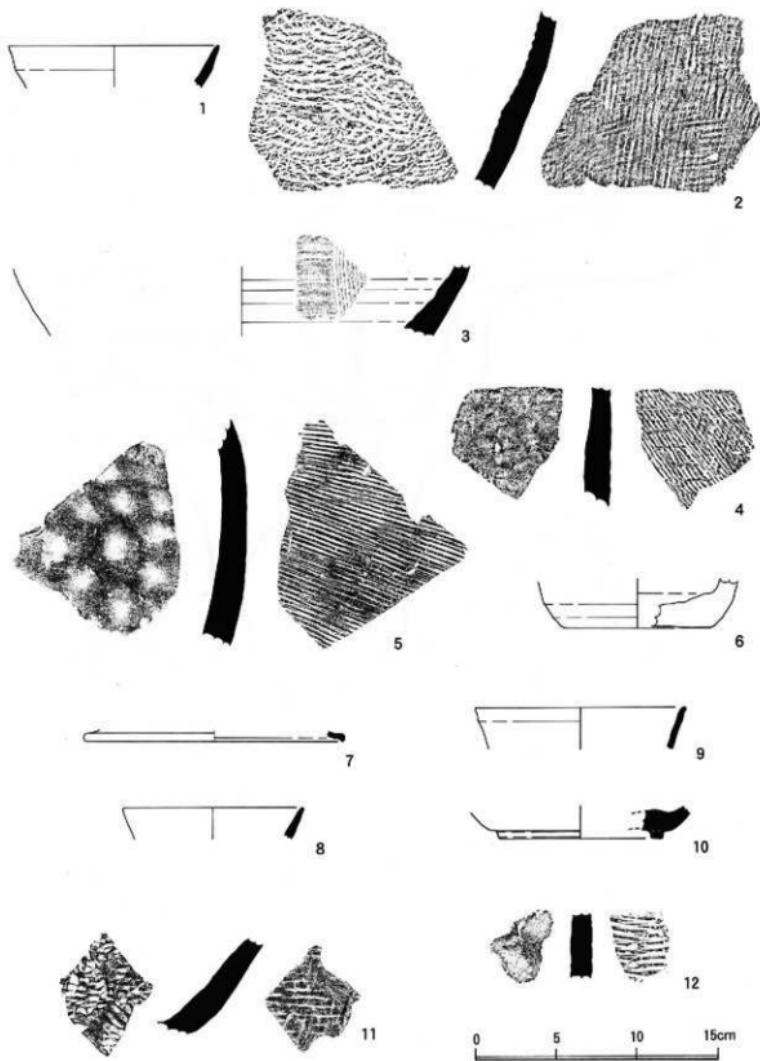
第13図 中尾地区の主な道路



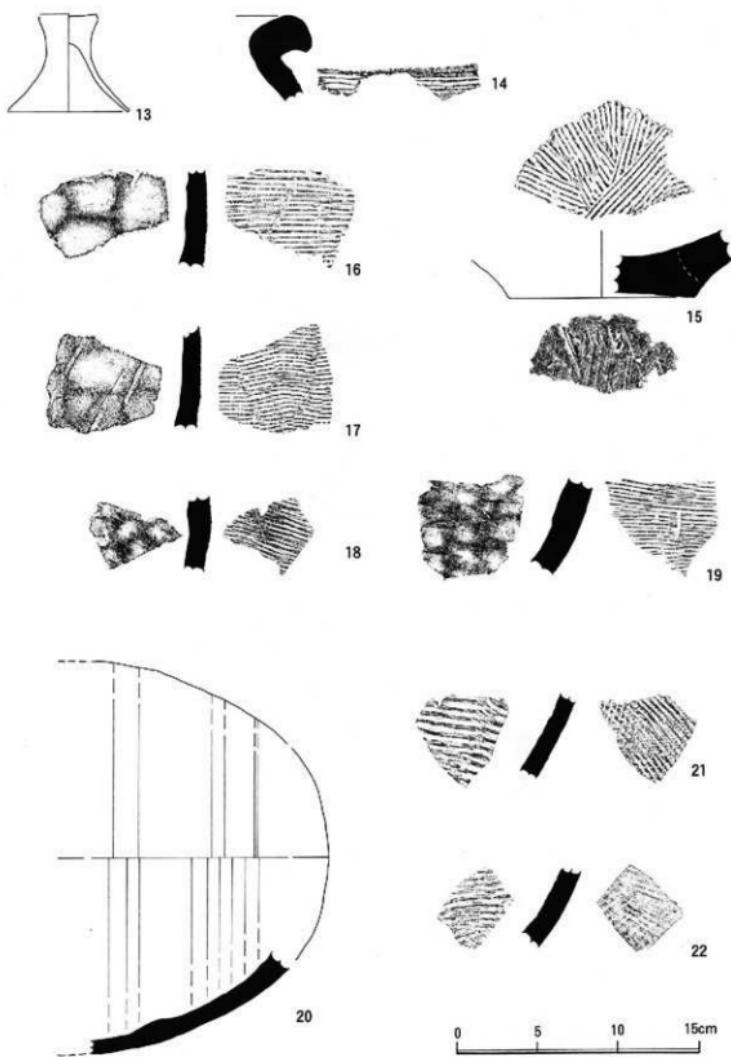
第14図 竹里山岩屋堂（上：地形図 $S = 1/1000$ 、下：実測図 $S = 1/200$ ） 水見市2002から引用

第15図 中尾白山神社境内略圖

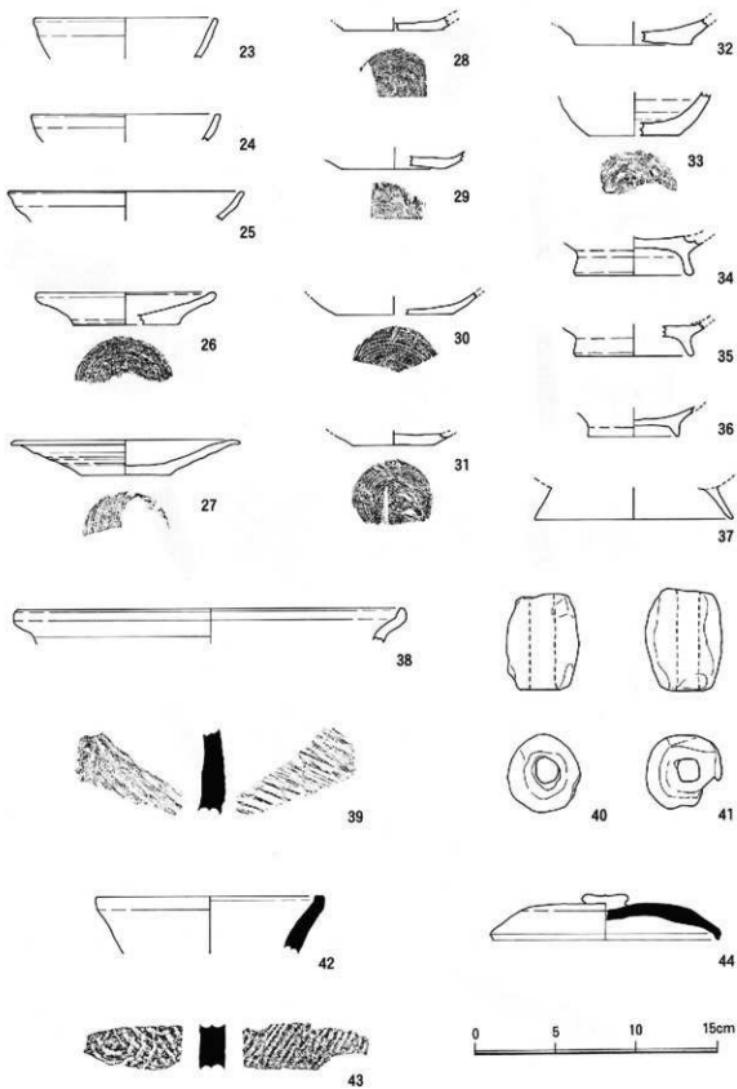




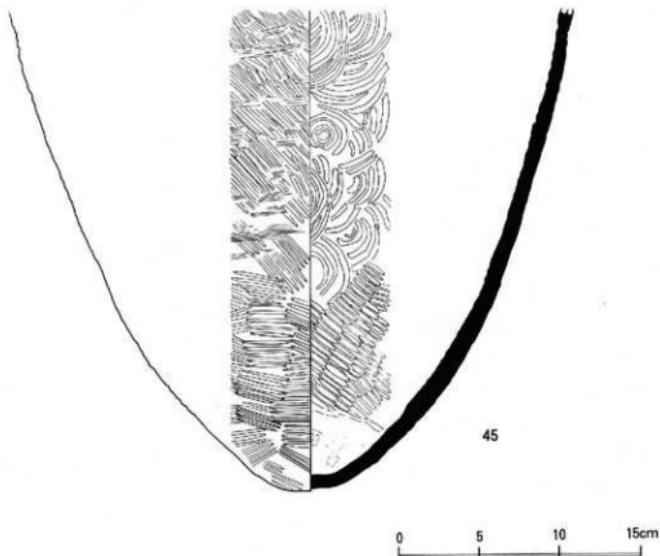
第16図 遺物実測図(1) 1～6：泉C遺跡、7～12：泉中尾廃寺



第17図 遺物実測図(2) 13~19:白山神社境内、20~22:中尾新保谷内遺跡



第18図 遺物実測図(3) 23~41:中尾新保谷内遺跡、42~43:カヤド池堤、44:白山神社裏山



第19図 遺物実測図(4) 45: 中尾カヤド山中

中尾茅戸古墳群・中世墓（第13図4）

白山神社南側の丘陵尾根先端部に所在する。標高は24~27mである。氷見市史編さん委員会考古部会による分布調査によって、円墳が2基確認されている。

丘陵先端の1号墳は長径約8.3m、高さ約1.5mを測る。2号墳は1号墳から約30m西に所在し、長径約4.4m、高さ約0.5mを測る。2号墳の東西には尾根と直行する溝がある。南側で弥生時代末から古墳時代初め頃の土器が採集されている。

一方、この南側斜面で急傾斜崩壊防止工事を実施中、中世珠洲の小壺2、中壺4、すり鉢2、甕1と五輪塔空風輪1が出土している。時期は13世紀~14世紀のものである。空風輪は空輪と風輪の境目が曖昧なものであり、15世紀末以降のものである。

次に、中尾地区周辺で採集された遺物のうち、45点を図示した（第16~19図）。

1~6は、泉C遺跡（第13図5）採集のものである。1は古代須恵器杯である。口径13cmを測る。2は古代須恵器甕の体部破片である。3は中世珠洲すり鉢である。おろし目の単位は8+ α 本である。4と5は中世珠洲壺もしくは甕の体部破片である。6は近世越中瀬戸匝鉢底部である。底径8.8cmを測り、全体に鉄軸を施す。以上、本遺跡には古代・中世・近世の資料がある。

7~12は、泉中尾庵寺（第13図6）採集のものである。7は古代須恵器杯蓋である。口径は16cmを測

る。8は古代須恵器杯であり、口径は11cmを測る。9は古代須恵器杯であり、口径は13cmを測る。10は古代須恵器杯B身の底部であり、台径は10cmを測る。11は古代須恵器壺の底部破片である。12は中世珠洲壺の体部破片である。以上8世紀頃と中世の資料がある。なお、本遺跡からは古代末頃の金銅仏が明治頃に出土しているが（氷見市指定文化財）、この金銅仏に合致する時期の遺物は確認されていない。

13～19は、白山神社（第13図3）境内採集のものである。13は弥生時代終末期の壺脚部か。全体的に摩滅が激しい。すぐ南側の中尾茅戸古墳群と関連するものであろうか。14は中世珠洲壺の口縁部である。15は中世珠洲すり鉢の底部であり、底径は11.4cmを測る。9本単位のおろし目を密に施す。16～19は中世珠洲壺又は壺の体部破片である。なお、18・19は平成元年8月に林寺巣州氏が採集したものである。

20～41は、中尾新保谷内遺跡（第13図7）採集のものである。20は古代須恵器横瓶である。21・22は古代須恵器壺の体部破片である。23～37は古代土師器のロクロ成形による皿又は椀である。23～25は口縁部の破片であり、口径はそれぞれ11.4cm、11.8cm、14cmである。26は底部を厚くした皿であり、口径11cm、器高2cmを測る。27は口縁端部が反るタイプの皿であり、口径14.2cm、器高2.2cmを測る。28～33は無台の底部である。34～37是有台の底部である。38は古代土師器壺の口縁部破片である。口径24cmを測り、端部が垂直に立ち上がるタイプのものである。39は中世珠洲壺又は壺の体部破片である。40と41は土錐である。40はほぼ完形品、41は一部を欠損する。重量は40が99.4g、41が96.2gである。以上、本遺跡には古代と中世の資料がある。特に古代は7～8世紀代の須恵器横瓶があるものの、主体は9世紀末から10世紀初めの資料である。

42・43は、カヤド池堤（第12図8）採集のものである。42は古代須恵器鉢であろう。口径は14cmを測る。43は古代須恵器壺の体部破片である。

44は、白山神社裏山（第12図9）採集のものである。古代須恵器杯B蓋であり、口径は14cmである。つまみ部分を欠損する。8世紀中頃～後半のものであろう。

45は、カヤド山中（第12図10）出土のものである。古代須恵器壺の体部破片であり、長胴タイプの中型品であろう。

（大野 究）

おわりに

今年度は、上庄川中流域右岸に位置する滝尾山と竹里山の二つの中世寺院伝承地を重点的に踏査した。残念ながら、遺構・遺物共にこれまでの知見以上の新たな成果はあまりなかった。

しかしながらこれまでに知られた伝承や遺構・遺物の存在からすれば、中世寺院の伝承を全く否定することはできないだろう。今後機会を見て発掘調査などによって確認が必要となろう。

竹里山の麓、中尾地区については、これまで採集されていた資料を一通り整理して本書に掲載することができた。山頂の千久里城跡から白山神社の鎮座する谷にかけてのこの地域は、弥生時代終末期に開発が始まり、古墳時代・古代・中世と断続的に営みが続いた。古代では奈良時代の資料とともに、中尾新保谷内遺跡で9世紀末から10世紀初め頃の資料が確認された。中尾廃寺出土の金銅仏や白山神社所蔵の平安末と推定される木造大日如来像の存在から、平安時代の寺院が存在した可能性が指摘されているが、考古資料では今のところこれら仏像よりもやや古い資料しか確認されていない。竹里山岩屋堂の時期については、いまだ不明な点が多く、城跡との関連も不明であるが、中尾茅戸中世墓の存在を合わせると、中世にも何らかの宗教関連施設が存在した可能性が高い。

中尾地区は能越自動車道のルートが通ることになり、富山县文化振興財団によっていくつかの遺跡の発掘調査が実施されている。詳しい成果がまとめられるのは、もう少し先になるようであるが、それらの成果を合わせれば、よりいっそう中尾地区的歴史が明らかになることであろう。

来年度はいよいよ丘陵地区分布調査の最終年度であり、市南部地区的丘陵を踏査する予定である。少し心配なのは今年、これまで水見では確認されていなかった熊の目撃例が市南部地域で多かったことである。十分注意をして踏査を行いたい。

(大野 究)

参考文献

- 大野究 1998 「イヨダノヤマ3号墳」『水見市立博物館年報』第16号
- 奥村秀雄 1993 「碁石の歩み」
- 上庄村史編纂委員会 1963 『上庄村史』
- 熊無村史刊行委員会 1997 『熊無村史』
- 久目村史編集委員会 1990 『久目村史』
- 児島清文 1962 『水見市地名考』
- 石動山文化財調査団・水見市教育委員会 1989 「国指定史跡石動山文化財報告書」
- 中葉博文 1980 『水見市地名の研究』
- 西井龍儀 1987 a 「小窪廃寺」「北陸の古代寺院 その源流と古瓦」 桂書房
- 西井龍儀 1987 b 「小窪瓦窯」「北陸の古代寺院 その源流と古瓦」 桂書房
- 橋本芳雄 1955 「小窪廃寺の心礎と瓦窯跡」「越中史垣」5号
- 速川村史編集委員会 1987 『速川村史』
- 林喜太郎 1930 「熊無村横穴古墳」「富山県史蹟名勝天然紀念物調査報告」第10号
- 水見市 1963 『水見市史』
- 水見市 1998 『水見市史』3 資料編一 古代・中世・近世(一)
- 水見市 1999 『水見市史』9 資料編七 自然環境
- 水見市 2000 『水見市史』6 資料編四 民俗・神社・寺院
- 水見市 2002 『水見市史』7 資料編五 考古
- 水見市教育委員会 1984 「富山県石動山信仰遺跡遺物調査報告書」
- 水見市教育委員会 1993 「水見市遺跡地図(第2版)」水見市埋蔵文化財調査報告第14冊
- 水見市教育委員会 2001 「新保南遺跡 中山間地域総合整備事業に伴う試掘調査概要」水見市埋蔵文化財調査報告第34冊
- 水見市教育委員会 2002 『水見市埋蔵文化財分布調査報告(丘陵地区)Ⅱ』水見市埋蔵文化財調査報告第35冊
- 水見市教育委員会 2002 『水見市神社調査報告書』
- 水見市教育委員会 2003 『新保南遺跡 中山間地域総合整備事業に伴う発掘調査報告書』水見市埋蔵文化財調査報告第37冊
- 水見市教育委員会 2004 『水見市埋蔵文化財分布調査報告(丘陵地区)Ⅳ』水見市埋蔵文化財調査報告第40冊
- 水見市教育委員会 2005 『千久里城跡』水見市埋蔵文化財調査報告第42冊
- 水見市教育委員会・水見市立博物館 1983 「水見市遺跡地図 埋蔵文化財包蔵地所在地地図」 水見市文化財所在地図No.1
- 北陸中世土器研究会 1997 「中・近世の北陸」桂書房
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館

図 版

図版一 分布調査の成果(1)



上余川地区片倉八幡神社



片倉八幡神社の石造物



上余川一の瀬八幡社の
石造物

図版二
分布調査の成果
(2)



図版三 分布調査の成果(3)



中尾地区白山神社



中尾地区白山神社境内の
五輪塔



竹里山岩屋堂内部

図版四 分布調査の成果(4)



十二町矢崎横穴群

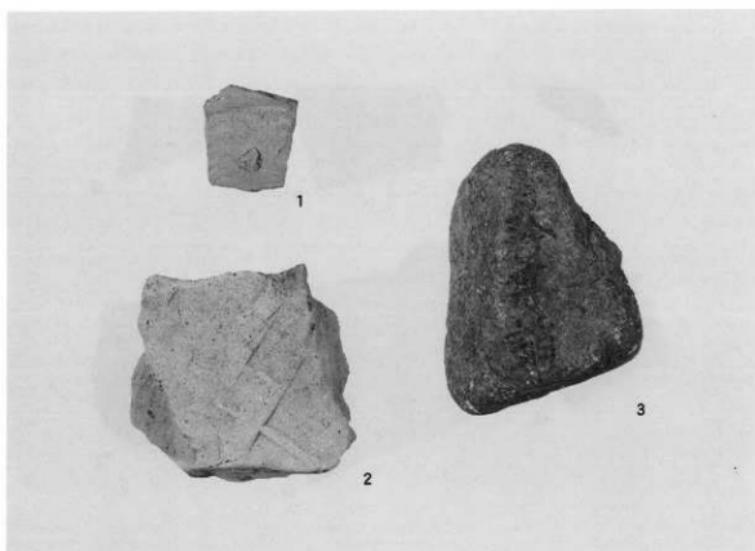


十二町矢崎横穴群開口部

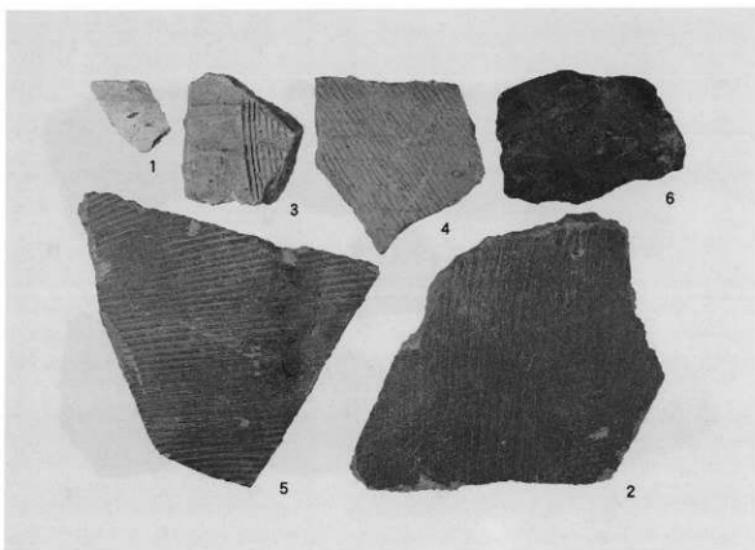


十二町矢崎横穴群中段の
横穴状凹み

図版五 採集資料(1)

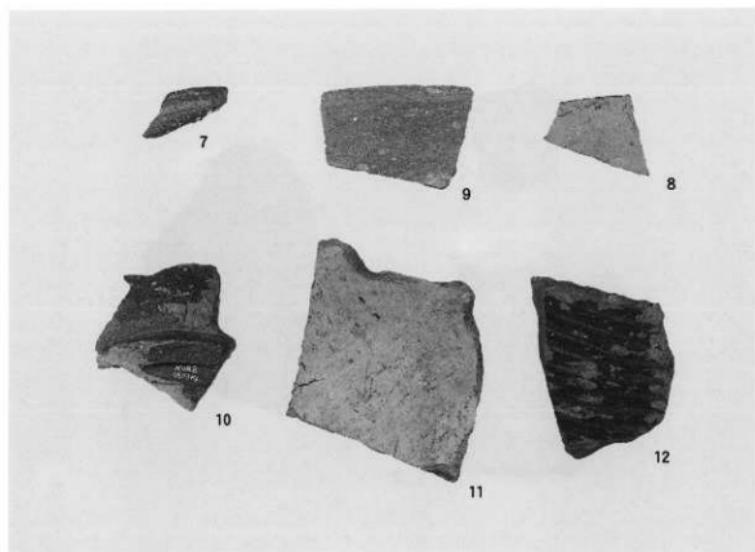


小窓庵寺、小窓瓦窯、久目経塚（第7図参照）

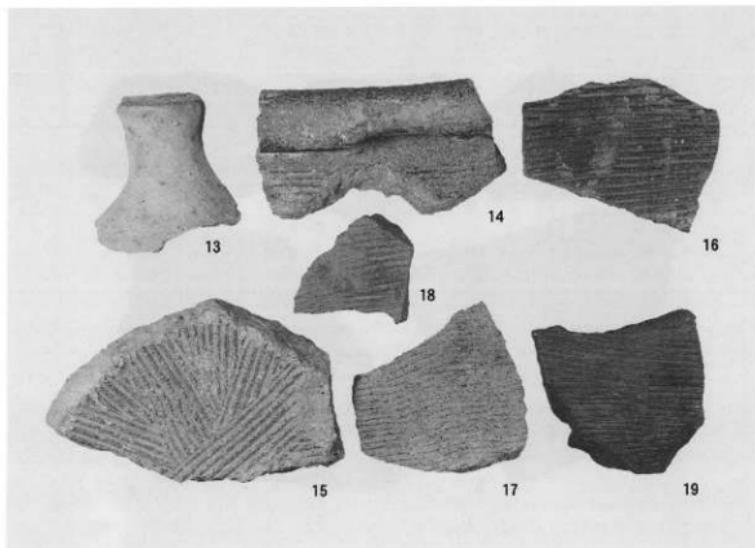


泉C遺跡（第16図参照）

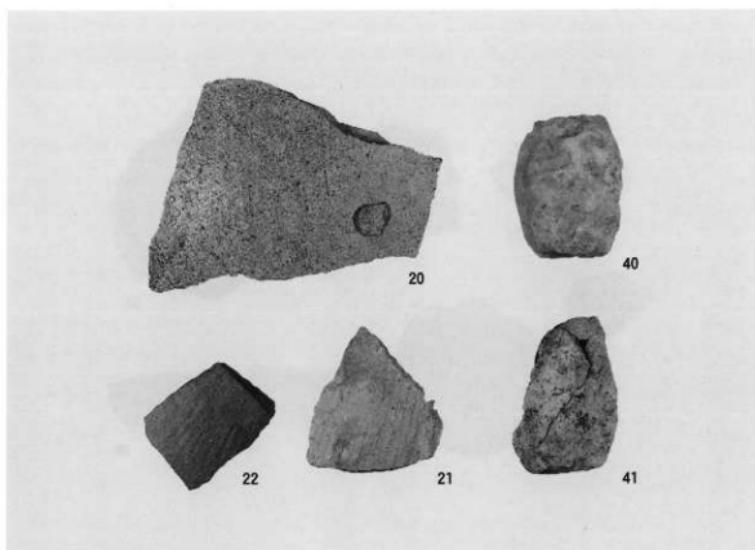
圖版六
採集資料(2)



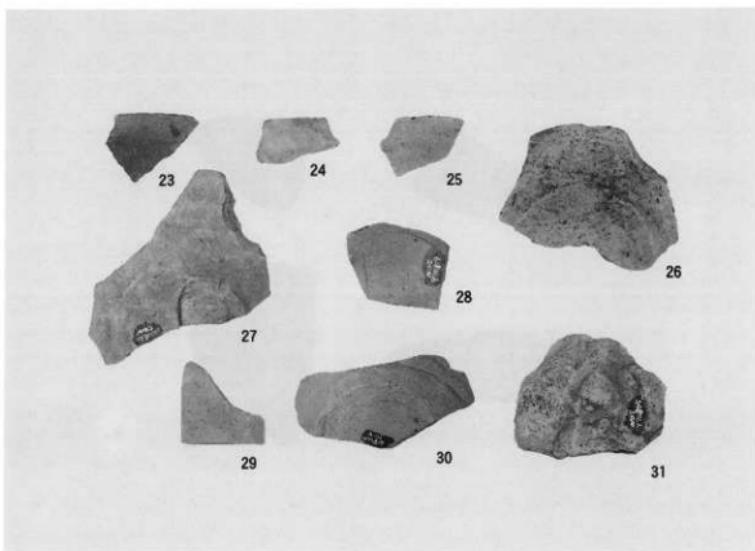
泉中尾廃寺（第16図参照）



白山神社境内（第17図参照）

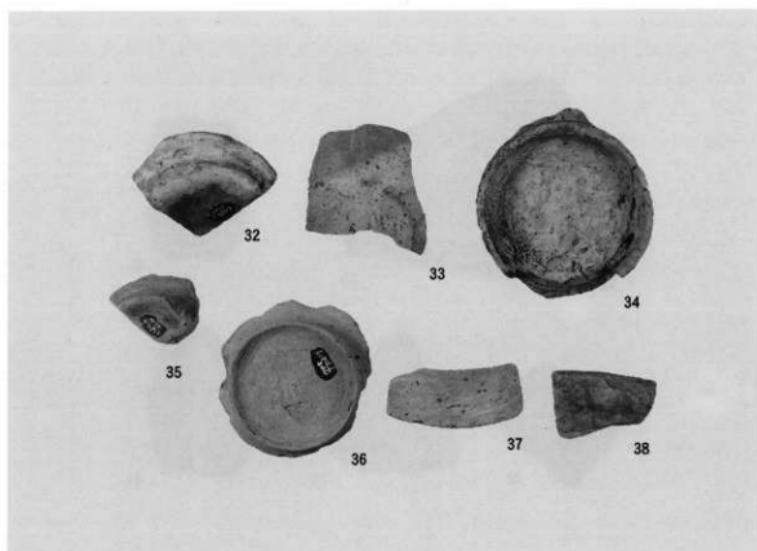


中尾新保谷内遺跡（第17・18回参照）

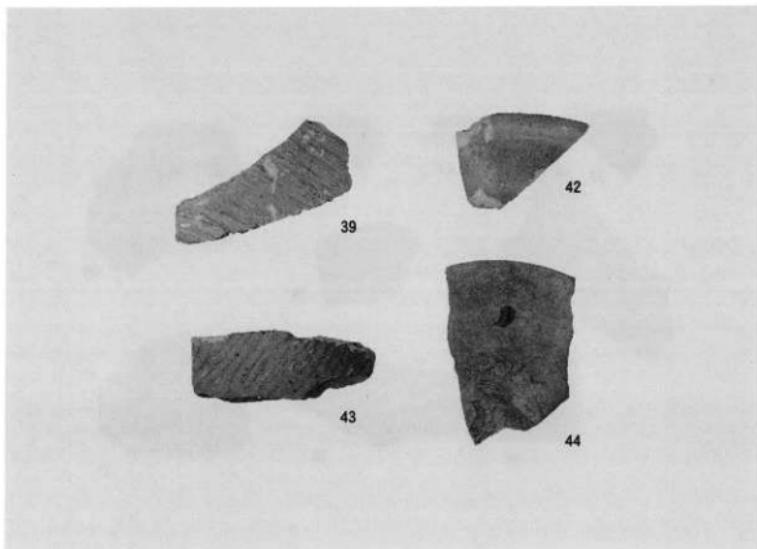


中尾新保谷内遺跡（第18回参照）

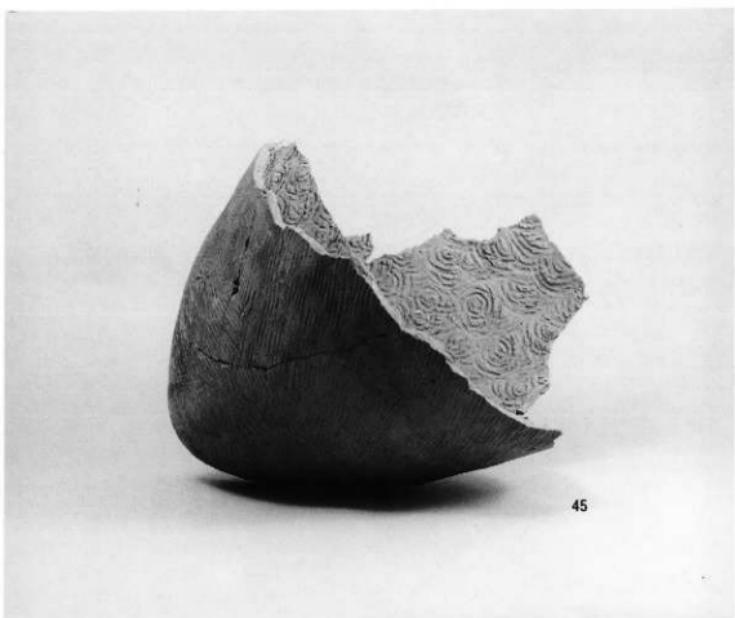
図版八 採集資料(4)



中尾新保谷内遺跡（第18回参照）



中尾新保谷内遺跡・カヤド池堤・白山神社裏山（第18回参照）



45

中尾カヤド山中（第19図参照）

平成17年3月25日 印刷
平成17年3月31日 発行

水見市埋蔵文化財調査報告第43冊
水見市埋蔵文化財分布調査報告(丘陵地区)V

編集・発行 水見市教育委員会
〒935-0016 富山県水見市本町4番9号
☎0766(74)8215 (生涯学習課)

印 刷 有限会社 ひふみ印刷社